

負傷者16人

度合いや自分たちの文化との違いを知ること
はとても楽しいです。そもそもこういう機会
でもなかつたら、アラビア語はもちろん、オ
ランダに生きるイスラム系の青年のことを考え
えることもなかつただろうし。

井上●僕はクラシック音楽を勉強していくこともあるって、分からぬ言語もとりあえず口に出すことはできるんです（笑）。でもやつぱり、一つひとつの意味を理解していないと伝えられないことって多いんですよね。例えば「アザーン」って、子どもが生まれるときに歌いかける歌が劇中に出てくるんですけど、それは死ぬときにも耳元に歌いかけるものだと教えていただきました。そんな大切な歌、僕たち日本人にはないし、ほかの仏教圏やキリスト教圏にもきっとないですね。ユダヤ教のシンボルを粗略に扱う場面なども、それがどのくらいのダメージを相手に与えることな

——そうして経験を積み重ねるうちに「芝居をしたい」気持ちが強まつていったんでようか。

というよりは「歌いたい」っていう気持ちの方が強かったと思います。でも、実際にやつてみたらミュージカルも芝居だったんですね、当たり前ですけど。だから僕の場合はデビューしてすぐに、ストレートプレイをやることを意識し始めました。もちろん、ミュージカルをやりながら演技を大事にすることもできますけど、やっぱり音楽の力は大きいし、それに助けられちゃう部分もある。このままではミュージカルの芝居さえちゃんとできなくなるって危機感を感じていたし、「ミュージカルでは役を演じられるけど、ストレートプレイじゃできません」なんておかしな話だと僕は思つたので。

生活することの幸せを知ったのかもしれません。
だから、その意味は大きいと思います。
ただ、マフムードの場合はその幸せを守り
続けることができないんです。それは彼自身
というより、今も世界中で続く憎しみ合いの
せいで。だから、国や宗教、育つ環境によ
つてこんなにもうまくいかないことがあるつ
ていうのには、すこしやりきれなさ、救いの
なさを感じます。でもその悲しみのぶんだけ、
このことは芝居にして伝える意味があるなど
も思います。



井上芳雄

宗教や民族、敵対する立場を超えて、分かり合うことはできるのか。血塗られた歴史の先に幸福はあるか——。血気盛んなパレスチナ人青年と、苦い過去を抱えて生きるユダヤ人のパン職人との心の交流と別れを描いた「負傷者16人」は、人間の温かさと愚かさ、哀しみを丹念に描き出す問題作。主人公・マフムードを演じる井上芳雄もまた、世界情勢、アラビア語、宗教儀礼……さまざまな初体験を通じ、世界を見つめ直すための新たな扉を開けようとしている。

インタビュアー○鈴木理映子（演劇ライター）

宗教・人種の対立が生み出す哀しみと「ささやかな幸せ」への願い

——演出の宮田慶子さんは以前から「ストレートプレイでがっぷり組みたいね」とお話をされていましたね。

井上 ● 宮田さんにはデビューして一、三年目のころに、台本の読み方や役作りの方法を教えていただいたこともあるし、仕事では芝居とショーケース融合させた「Triangle」シリーズでも一緒にやっていて。その間にもずっと「本格的なストレートプレイをやりたい。どうせやるなら、歌や音楽のない逃げ場のないものにしたい」って話はしていましたが、今回ようやくそれが叶いました。タイトルからして重い話ですし、これほど直接的に世界情勢を反映した作品は、僕にとっても初めての経験なので、ちょっとドキドキしています。

——本来なら「敵」であるはずの、パレスチナ人青年とユダヤ人のパン職人が心を通わせる物語。そこで描かれる人間同士のふれあいの背景には、国家や宗教、人種など、複雑な事情も見え隠れします。

井上 ● もちろん、彼らが抱えている問題は、なかなか僕らには分かり得ないものだととも思います。僕も最初にこの台本をいただいたときには「やっぱりイスラム教のことやパレスチナのことを勉強しないと分からぬかも」なんて思いました。でも時間を置いて読み直

してみたら、印象が変わったんです。主人公のマフムードは、僕とそんなに歳も変わらない一人の男性なんですよね。そんな人が新しい出会いを機に家庭を持とうとする話は、僕たちにとってもすごく身近なものです。僕は井上ひさしさんの作品がすごく好きなんですが、その最後の作品で僕がやらせてもらつた小林多喜二も、マフムードと同じように「パン屋さんで働いている役だつたんです。多喜二は「貧しい人にも買えるよう」と思つて作ったパンさえ買えない人がいる。どうしてそんな小さな幸せも守られないんだろう」というシンプルな想いで、世の中の歪みに立ち向かおうとする。それは、マフムードにも共通する願いなんじゃないかな。

――そういった小さな幸福の大切さを伝えることが、世界の複雑さをよりリアルに感じさせることにつながるのかもしれません。

井上● そうですね。やっぱり、自分たちの日々の生活が守れる、ことって、本当に尊いことだと思います。マフムードはハンスに会つて「パン屋になる」って言い出すんですけど、このことだって、オランダの人にしてみればパンは主食ですから。生活の基盤の豊かさを象徴しているのかもしれない。もしかするとマフムードはそこで初めて、仕事をして

考えてみると、僕がミュージカルでやつて
きた役つてほとんどが白人種なんですね。
それつてちょっと偏つてますよね。アジア系

も、いは、アラブ系も、いるつて、いうのが、この世界だし、そのどれにもなれるのが舞台俳優の醍醐味だと思います。

イスラムの青年を演じる自分は想像できなくて、でもそれにチャレンジするのが俳優の仕事

でもそれにチャレンジ

——ミニーシカル俳優としてテレビにされた井上さんも、近年ではコンスタントにストレートプレイに出演されています。これは意識して決められていることですか。

ないけれど、大切なのはちゃんとお客様に伝わる芝居ができるかどうかですから。だから今はなんの垣根もなくミュージカルもストレートプレイも両方やれる俳優になりたいと思っています。どんな作品のときも、こんなに台詞ばかりで大丈夫かなとか、こんな役できるかなとか、何かしら不安は感じます。でも、経験則でできることばかりやつてもダメでしよう。以前はハムレットを演じる自分を想像することはなかつたし、今もイスラムの青年をやつてる自分はまだ想像できていない。でもそれにチャレンジするのが俳優の仕事ですから。

いのうえ・よしお

2000年にミュージカル「エリザベート」のルドルフ役で鮮烈なデビューを飾る。以降、その高い歌唱力と存在感で数々のミュージカルや舞台に出演。またCD制作やソロコンサート、ディナーショーなどの歌手活動も積極的に行っている一方、近年ではストレートブレイヤや映像等に出演し、演技者としての幅も広げ、俳優として高い評価を得る。5月には映画「宇宙兄弟」が東宝系にて全国ロードショー公開予定。2006年第13回読売演劇大賞杉村春子賞、2008年第33回菊田一夫演劇賞を受賞。新国立劇場初登場。